

めた。そしてカシブに出て、鉄兵団の生き残りが歩いたとみられる跡をたよりに、カガヤン川、上流から人跡未踏の山中に入っていったのである。

何日か必死で歩いた。そのうち、私はマラリアが再発して動けなくなった。食料もなくなり、もうどうにもなるものではない。山腹の水の出るところに携帯天幕をかぶって、一人で寝ていた。と、頭の上で人の声があった。

兵隊が三人いて、私を見ていた。そのうち一人が、小さなサツマ芋を袋から出してくれた。ナマのまま、私は食べた。三人は近くの畠で掘ったといった。

話しているうち、この三人は鉄兵団の生き残りで、しかも私と同じ鳥取県八頭郡の出身だった。鉄兵団は兵庫県姫路の第十師団だったのだ。

三人はまた、貴重なイモを少しずつくれ、一緒に山を出ることになった。彼らの中にもマラリアで苦しんでいるものが出て、かばい合いながら歩いた。

山麓にやはり鉄兵団の兵隊が数人いて、川に手榴弾を投げて魚を取っており、「戦争はもう終わった。自

分らは明日、米軍のいるところに出る」といった。

私たちがエチャゲの米軍キャンプを経由、カンルバンの捕虜収容所に入ったのは九月二十七日だった。

十一月一日、私は日本送還のため、呼び出された。各キャンプから集まった数百人の捕虜は無蓋列車でマニラに向かった。沿線の住民が列車に駆け寄り「パタイ（死ね）」などと口ぐちに叫び、石を投げた。

戦前、在留邦人はフィリピン人と軒を並べて住み、仲良く暮らしていた。フィリピンを愛し、そこに骨を埋めるつもりだった。当時の在留邦人のままだったら、こんなことは言われなかっただろうし、「強制送還」にもならなかっただろう、と思った。

あ！ 南十字星

東京都 市川 正子

私は、南方航空輸送部に勤務していた。半官半民の輸送部は、直接、戦闘に加わらず、後方部門として陸

海軍の将校、官僚の方々を任地移動による搭乗や、通信機材等の運搬にあたっていた。

マニラ支部の女子は台湾に生まれ育ち、学業を卒えた者であった。事務系統、タイピスト、通訳、電話交換手等、それと各支部より飛行してくる乗務員の宿泊所に勤務する女性は沖繩県出身で総勢二十数人だった。

マニラ奪還の米機の初空襲は、飛行場でうけ、からも命びろい、米機が滑走路にならぶ日本の飛行機を次々と撃破する数分間に気も動転しながら建物より逃れた。壕の中から燃える事務所、飛行機の猛火煙を、ただ茫然と遠望するばかり、マニラ湾停泊の日本の軍艦、輸送船は爆撃をうけた黒煙が何日もたなびき、子どもの宿舍も空襲にさらされ、バサイ地区へ移っても空襲は日増しに激しくなり、マニラ市全体が不穏な雰囲気に変ってきた。

夜半、各自バッグ一つをかかえ女子二十数人はマニラをあとにしたのだが、ゲリラ活動は活発で、無気味な周囲の不安は、クラーク飛行場をぬけるまでつづく、

一路北へと走りつづけたバスは、リングエン手前のロザリオで引き返し、この一帯は、米艦砲撃の的のリングエン附近は、米軍上陸に備え、日本軍がぞくぞくと集結し、ごったがえしていた。

私どもはバギオ守備の虎兵団の車両に便乗させてもらい、高く低く蛇行するベンゲット街道と、闇夜の中山頂へ、闇に向かい銃をかまえる兵士、その時の山のたたずまいの、不気味さ、深い不安の入り交じったものとしか言いようがありません。

標高一千五百メートルのバギオ山荘の明けくれば、地上の戦争を忘れさす静かなものでした。しかし、一月六日リングエン湾上陸の米軍が、山麓に布陣する強力な日本軍に阻まれながらも、いよいよ山嶺へと進撃、遠雷のようにとどろく砲声は、のどかな山の雰囲気を変えはじめた。山都はやがて戦場化、ロッキードP 38が特有の金属性の爆音で、山あい、谷間へと爆撃をくりかえしはじめた。赤十字の病院や教会、ところかまわずの猛爆、谷間の壕に横たわる傷病兵の姿は日増しにふえ、夜な夜な砲声と周囲のあかあかと燃える山な

みに暗澹たる思いが深まる頃、山下將軍はバギオを見捨て、北のキャンガンへ移動したと云う情報が人づてに耳に入ってきた。

米軍はバギオに接近、月夜のない夜陰にバギオを脱出したのが、三月に入った頃、山道は兵士の群、幼な子の手をひく在留邦人の姿と、一刻を競う人びとは、無言で真剣さに迫る凄さそのものでした。

地形上、どうしても横切らねばならぬトリニダット附近は、特に米軍の砲弾の打ち込みが凄まじく、どうして私達は切り抜けて走ったのか、判らない。いまだに脳裡に焼きついていっているのは、前後にあかあかと燃える炎・耳をつんざく砲声・あの時の光景が鮮烈に浮かびあがってくる。

その後、カガヤン平野へたどる逃避が始まるのであるが、私達はズボンに地下足袋、食糧の米、一枚か二枚の着替えの肌着だけのいでたちは、むろん白粉気なく、男子と見違ふ短い髪、顔は蒼白、無言の中にも、死なば諸共にとの連帯感、何にも増して強かったように思います。

執拗に追ってくる米機をさけての夜行軍、南洋特有のスコール、無装備な私たち仲間、やがてマラリアの発熱におかされ始め、体力の衰えが目に見えはじめた頃、マニラから付き添ってきた看護婦が、持参していた薬で、自ら命を絶った。悲しみの極だった。

私達はマガット河を渡って、通信関係の部隊の保護のもとに山中彷徨がはじまりました。

再び入った山中は、未踏の地にも等しく、首切風習のあるイゴロット族に、ゲリラの出没、食糧難と文字どおりの悲惨そのもの、山の激しい気候の変容に弱った体力をいっそう弱めていった。

終戦を知ったのは、かなり奥深く入った、ナトニンという部落であった。

ルソンのジャングルの山の端に光る、南十字星に、涙ながら明日の命を祈った当時をしのぶ時、自然に胸の中が熱く、半世紀を過ぎ今なお、涙を禁じ得ない。